

エテホン液剤処理による‘新興’輸出用穂木の花芽着生率向上

1 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

‘新興’の輸出用穂木生産において、花芽を多く確保することは製品率の向上のために重要である。これまでに花芽着生を向上させる方法としてエテホン液剤の散布が有効であることが知られているが、同剤の使用目的は果実の「熟期促進」に限定されている。そこで「花芽着生促進」を目的とした農薬登録適用拡大に向けた試験を行った。

(2) 情報・成果の要約

エテホン液剤 2,000 倍液を満開後 60～70 日頃に、また 1,000 倍液を満開後 100 日頃に、いずれか散布することによって、‘新興’の花芽着生率が向上する。

2 試験成果の概要

- (1) 調査は 2018～2020 年の 3 年間実施し、試験開始時 23 年生の‘新興’ 3 樹を供試した。エテホン液剤の使用時期、使用倍率により、表 1 のとおり処理区を設定した。

表 1 処理区の設定

| 処理区 | 使用時期 | 散布日 (満開後日数) | | | 使用倍率 |
|------|------------------------------------|-------------|-----------|-----------|---------|
| | | 2018 年 | 2019 年 | 2020 年 | |
| 前期区 | 果実横径 30～35mm の時期 (満開後 60～70 日頃) | 6/7(61) | 6/26(72) | 6/23(69) | 2,000 倍 |
| 後期区 | 果実横径 60mm 以上の時期 (満開後 100 日頃) | 7/20(104) | 7/26(102) | 7/31(107) | 1,000 倍 |
| 無処理区 | — | — | — | — | — |

- (2) 落葉後に長さ 10cm 以上の 1 年枝を採取し、本数、長さ、えき花芽数、重量を測定した。その後、「台湾向け‘新興’花芽穂木出荷規格 (全農とっとり)」に従って調製を行い、重量を測定して穂木製品率を算出した。
- (3) 前期、後期いずれの散布でも花芽着生率は向上し、うち 2 年で無処理区との間に有意な差が認められた (図 1)。
- (4) 穂木製品率も 3 年のうち 2 年で向上が認められた (図 2)。

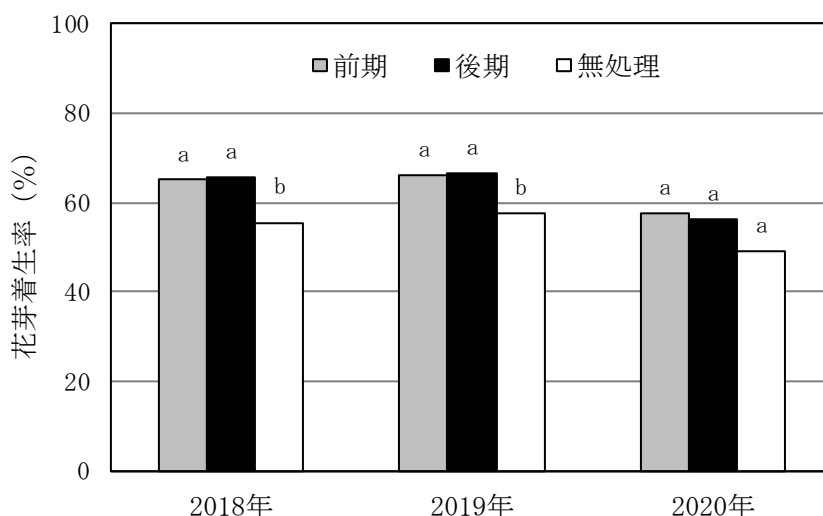


図 1 エテホン処理が‘新興’の花芽着生率に及ぼす影響 (2018～2020 年)
多重比較検定 (Tukey-Kramer 法) により、同一年内の異符号間には 5% レベルで有意差があることを示す

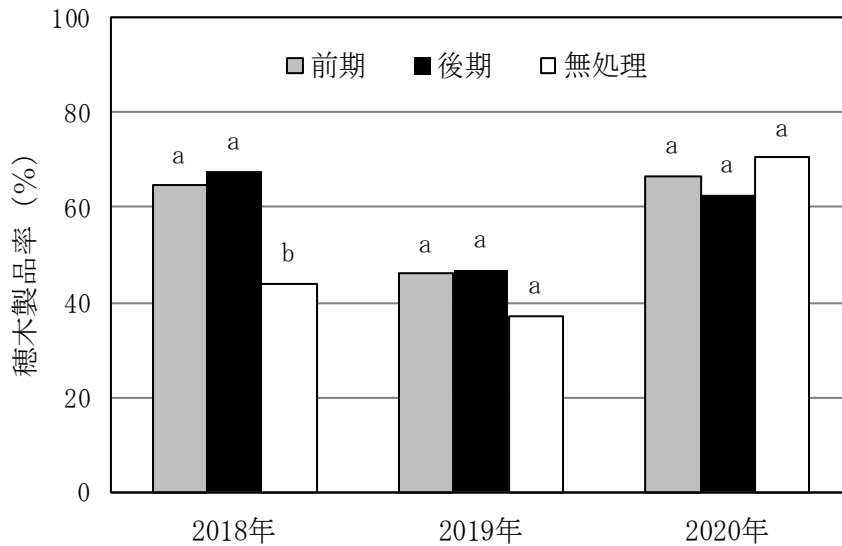


図2 エテホン処理が‘新興’の穂木製品率に及ぼす影響 (2018～2020年)
 多重比較検定(Tukey-Kramer法)により、同一年内の異符号間には5%レベルで有意差があることを示す

3 利用上の留意点

- (1) 「なし」におけるエテホン液剤の使用目的は「熟期促進」に限定されているが、現在、「花芽形成促進」を使用目的に適用拡大申請中であり、本成果の活用はその完了後となる。
- (2) 台湾向けナシ花芽穂木出荷規格には、花芽の数の他に枝の長さや太さについても要件が定められていることから、花芽数が増えても製品率が向上しない場合がある。

4 試験担当者

果樹研究室 主任研究員 岡垣菜美^{※1}
 主任研究員 河原拓
 研究員 遠藤宏朗^{※2}
 研究員 安藤るな
 室長 池田隆政^{※3}
 室長 山本匡将

^{※1} 現 生産振興課 係長

^{※2} 現 生産振興課 農林技師

^{※3} 現 農業大学校 教授